

資料

在日コリアンの文化活動：継承、実践、交流 朴日粉氏講演記録

猿 橋 順 子*

本稿は、2025 年 10 月 27 日に猿橋順子ゼミナールで実施した朴日粉氏の「在日コリアンの文化活動：継承、実践、交流」と題する講演の記録である。朴日粉氏のプロフィールは以下の通りである。

朴日粉（パク・イルブン）：1954 年島根県生まれの在日朝鮮人二世。朝鮮時報記者、朝鮮新報文化欄記者、論説委員、編集局副局長を歴任。定年退職（2018）後は、公益財団法人在日朝鮮学生支援会代表理事に就任（現在は理事）。一般財団法人邑翠文化財団副理事長。著書に『生きて、愛して、闘って——在日朝鮮人一世の物語』（朝鮮青年社、2002 年）、『いつもお天道さまが守ってくれた——在日ハルモニ・ハラボジの物語』（梨の木舎、2011 年）、『過去から学び、現在に橋をかける』（梨の木舎、2018 年）、『聞き書き・清水澄子——愛と闘いの生涯』（朝鮮大学校朝鮮問題研究センター、2021 年）など多数。

講演に至った経緯は、2025 年 9 月に開催された洪永佑回顧展（9 月 9 日～14 日、名古屋市民ギャラリー栄）を猿橋ゼミの夏合宿で訪れたことにある。

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

洪永佑（ホン・ヨンウ、1939-2019）は、在日朝鮮人二世の朝鮮民俗画家で、朝鮮青年社、朝鮮画報社、朝鮮新報社で文筆活動にも精力的に取り組んだ。朴日粉氏は洪永佑氏の朝鮮新報社時代の後輩で、今般の洪永佑回顧展の企画と運営に尽力した。

洪永佑回顧展では、朝鮮民族楽器ソヘグムの演奏（尹慧瓊氏・河明樹氏）、邑翠文化財団理事長の鄭禧昇氏の講演を聴いた。ゼミ合宿終了後、ゼミ生達は回顧展の感想文を書き朴日粉氏に届けた。また、この講演に先がけ、前田（2022）¹⁾掲載の朴日粉氏のインタビュー記事を読んだ。本記録は、前半は朴日粉氏の講演、後半は受講生との質疑応答となっている。

【講演】

1. あいさつと自己紹介

9月に洪永佑回顧展で猿橋ゼミのみなさんにお目にかかりました。猿橋先生から回顧展の感想文をいただきました。皆さんが共感をもって、絵をすごく丹念に、細部にわたって見て、考えて、感想文を寄せてくださったことをとても嬉しく思います。洪永佑先生が生きていらしゃったら感動されたと思います。ありがとうございました。

私は朝鮮新報社に入社してから25年ほど、日本の皆さまを主たる読者とする朝鮮時報の記者をしておりました。その後、在日コリアンを読者とする朝鮮新報の文化部に移りました。40年間の記者活動の中で、平壤には計13回、ソウルには2回、金剛山歌劇団²⁾の公演の同行取材などで行きました。

文化欄を担当してからは日本の方々との仕事が多かったのです。三國連太郎さんや三浦綾子さん、丸木俊さんをはじめさまざまな分野の方々にインタビュー

1) 前田朗 (2022)『ジャーナリストたち』三一書房 (pp.49-65)。

2) 1955年6月在日朝鮮中央芸術団として創設。1974年8月、金剛山歌劇団に団体名称変更。声楽、器楽、舞踊、舞台制作の部門をもつ在日コリアンによる総合アーティスト集団、東京都小平市。

一をさせていただきました³⁾。2000年以降は、在日一世の聞き取りに取り組んできました。その中で私の心に深く残っているのは、在日一世が祖国を離れ、日本に来て、様々な苦難がたくさんあったけれども、人間というのは自分の苦労について、家族には言えないものです。苦労したことを自分の子どもたちにはどうしても言えないと、「こんなこと、初めて話すんだよ」という話をたくさん聞いてきました。そういうことも含めて今日はお話したいと思っています。

2. 朝鮮学校設立 80 周年を迎えて

今日のテーマは「文化」ですが、「文化」というと柔らかくて、芸術や音楽というのは国境や民族を超えて人々の心に残る、素晴らしいものです。ですが在日朝鮮人にとっては、36年にわたる朝鮮の植民地支配というものがありました。その中で朝鮮の歴史や言葉、朝鮮語が弾圧され、朝鮮半島においてさえ子どもたちは朝鮮語を学ぶことができなかった。長い間そういう中であって、自分の民族の根本である朝鮮語によって文化を取り戻すということを求め、解放後に朝鮮学校が生まれました。

私の地元、足立区には東京朝鮮第四初中級学校があります。今年創立 80 周年を迎え、昨日は朝から夕方までイベントがありました。80 年というのは 1945 年の 8 月 15 日に日本が敗戦し、9 月には朝鮮学校の前身である国語講習所というのができました。なぜそんなに早くできたのかといえば、当時の在日一世が、子どもたちに自国の言葉を教えたいという思いが強かったのです。日本列島、北から南まで 1 年間で 300 箇所も国語講習所ができました。足立というのは、済州島の人たちが集住しており、いち早く国語講習所を作って民族教育を始めた所です。

それが 80 周年を迎えたということで、午前には式典を行い、午後からは同校の児童生徒、卒業生をはじめ保護者たちが歌や踊りを披露しました。午後には毎年恒例のバザーをやりました。朝鮮学校には日本政府による公的支援金、補

3) いずれも、朴日粉 (2018)『過去から学び、現在に橋をかける——日朝をつなぐ 35 人、歴史家・作家・アーティスト』(梨の木舎)に収録。

助がありません。すべて自分たちの手で学校を経営しているので、よくバザーをやります。バザーで私たち（女性たち）は、キンパ（朝鮮の巻きずし）やおでんを作ったり、テールスープを前日から煮込んだり、何十年もそうやってきました。そうになると女性達の負担がとても大きいので、近年はスープ類は自分たちの手で煮込みますけれど、キンパなどは業者から安く仕入れて、当日来た皆さんに販売します。その売り上げを学校に寄付します。

昨日は雨で大変でしたけれども、保護者や近隣の小学校、中学校の先生たち、町内の住民たち、交流のある日本の方たちがたくさん来て、いっぱい買ってくれました。とても楽しい一日でした。そんな一日を過ごしましたから、今日はクタクタですけれども、皆さんにお会いして、学校のこと、80周年を迎えたことをお伝えしなければと思って参りました。

3. 朝鮮新報の役割

私が在籍していた朝鮮新報も創立 80 周年を迎えました。式典は先週の金曜日（2025 年 10 月 24 日）に上野の東天紅で盛大に行われました。現役社員たち、私たち OB と日本各地から招かれたお客さんらが多数参加しました。

在日朝鮮人が解放を迎えたとき（1945 年）、日本には 230 万人の朝鮮人がいました。日本の植民地支配によって生活できなくなって渡日した人たち、あるいは強制連行で日本に来た人たち、そういう人たちが解放を迎え、約 1 年の間に 150 万～180 万人が帰国しました。当時日本の状況は混乱していて、帰れなかった人たちもいました。また、日本に長く暮らして、すでに生活の基盤ができあがった人たち、その中には資産を形成した人たちもいましたが、GHQ の政策で資産を持って帰ることができなかったのです。それらの理由でやむを得ず、日本に留まった人たちが 60 万人いました。その子孫が今、日本各地に暮らしています。やはり東京や大阪など都心部が多いですが、日本各地に朝鮮学校が設立されたので、その周辺に集まって暮らして今があります。

そういう人たちをつなぐメディアが朝鮮新報です。同胞たちに祖国と日本の情報を届けるという使命があります。在日朝鮮人たちは祖国のニュースも知り

たい。日本の状況がどんどん変わっていく中で、日本の人たちとの幅広い交流の様子、自分たちの民族的な権利、子どもたちの学ぶ権利を守るための情報を求めています。朝鮮新報には、そういう独自の役割があります。私が入社した頃は、英語、スペイン語、フランス語、日本語、そして朝鮮語で発行されていました。在日一世たちが朝鮮新報に託した思いが、今に続いています。

4. 朝鮮と日本の芸術文化交流

60万人の在日社会ですが、よく海外や日本の人たちから「在日の人たちは警察と軍隊以外は何でも持ってるね」と言われました。学校も銀行も新聞社もそして金剛山歌劇団、歌舞団もある。解放後は演劇、映画、音楽など芸術家らが力を結集し、目覚ましい活動を始めました。

祖国から離れて日本で暮らしていても、芸術活動が盛んです。洪永佑回顧展で演奏をしてくださった尹慧瓊（ユン・ヘギョン）さん、河明樹（ハ・ミョンス）さんも⁴⁾、ソヘグム（朝鮮の弦楽器）を弾くためのレッスンを幼い時からなさって、朝鮮学校で学ばれて、卒業後もずっと音楽活動に携わってきました。在日一世、二世がずっとその環境を守り、継承し、発展させてきたということです。たくさんの方々が応援してくださったということもあります。

後で詳しく紹介しますが、1970年代～90年代には日本と朝鮮民主主義人民共和国の文化交流はとても活発で、朝鮮から平壤学生少年芸術団、ピョンコマという子どもの芸術団が、確か日本に5回来たと思うんですけども、万寿台芸術団、国立平壤芸術団、朝鮮国立交響楽団も来日し、日本各地の都市を巡り活発に交流をしていました。

そういう文化交流がずっと続いてきましたが、2000年以降は拉致問題が大きな影を落として⁵⁾、文化交流が途絶えているということが残念でならない。

4) 猿橋順子 (2025) 「在日百年のファミリー・ライフストーリー：河家の場合【第四部 ソヘグム奏者の道】」『青山国際政経論集』116: 95-123. (<https://doi.org/10.34321/TF02041510>).

5) 2002年9月、小泉純一郎首相が訪朝した際、金正日国防委員長が諜報機関による日本人の拉致を認め、謝罪した。5人の帰国が実現したが、その後、進展していない。

なんとか、その突破口を開くべきだと活動なさったのが日本画家の平山郁夫先生です。何度も平壤に行かれ、高句麗古墳群の世界遺産登録を実現するために、ご夫妻で尽力なさいました。私たちはその先生のご苦勞を忘れることができません。ユネスコ文化使節として、パリ、東京、平壤を行き来され、活発に発信されました。そういう先駆者が日朝の文化交流と平和実現に尽力されたということを、皆さんも記憶の中に留めていただきたいと思います。

5. 民族の心をもち続けた画家、洪永佑

洪永佑（ホン・ヨンウ）先生のお話をします。先生と出会った時、私は30代だったと思います。先生は私の15歳年上で、当時、朝鮮画報や朝鮮新報の中堅幹部でした。その頃、新聞・出版業界には朝鮮新報だけではなく、朝鮮画報社、時代社等、何社もあって、若い記者たちが先生を慕って、囲む会を催しました。池袋で一杯飲みながら先生の話聞くという会です。

今でもそうだと思いますが、若い時には先輩方との間にいろんな葛藤が生まれます。そんな時、先生に愚痴をこぼしたり、悩みを相談したり。そういう時、先生は決して若者を嗜めることなく、常に自分たちが在日朝鮮人として、記者として、どう生きるのかというふうに、前向きに励ましてくださいました、どんな困難にぶつかった時でも、先生に話せば何とか解決する。先生は、そういう存在でありました。

先生は1939年、愛知県岡崎市の生まれ。1945年頃の日本はたいへんな食糧難で、暮らしにくい時代にあって、在日朝鮮人の暮らしはもっと厳しいものでした。そういう中で、祖国に帰った人たちも、残った人たちも苦勞を重ねたのです。洪永佑先生は貧しい家庭に生まれ、病気がちだったそうです。小学校から中学校までの間で学校に通ったのは4年しかなかったと、娘さんから聞きました。それでも先生は小さい頃から絵が好きで、貧しくて筆が買えない生活の中で、雨が降った後、土が少し柔らかくなるじゃないですか。そこに枝で漫画を描いたりしたそうです。小さい時から、孤独な生活の中でも絵を諦めなかった。

ただ、洪永佑先生は貧しさの中で、人知れず努力してきたということを、私たち（職場の後輩）に話すことはありませんでした。他方で、私は在日一世の取材の中で、貧しくて学校に行けなかった在日のおばあちゃんたちのライフヒストリーを聞いてきました。朝鮮朝末期、儒教の影響があり、男子は学校に通わせますが、女子は学校に行かせないということが多々ありました。そのような家庭で育った女性は、兄や弟が学校から帰ってきた後、その教科書を借りて勉強したそうです。紙がありませんから、どうしたかと言えば当時の燃料はガスではなく、薪を使っていましたね。すると灰が残る。その灰の上に鉛筆代わりに枝を使って、何回も何回も字を書いて朝鮮語を覚えたという。そういう中でも決して学ぶことを諦めなかった。そうやって朝鮮語を独学した女性たちがたくさんいたのです。ですから、私が後に娘さんからお聞きした洪永佑先生の生い立ちには、時代が違いますが、私が話を聞いてきた一世の女性たちの体験が重なります。

先生が2019年にご逝去された時、その告別式には記者たちもたくさん参列しました。私たちにとって先生は、画家であるとか、記者であるとか、編集者であるというよりも、民族の心をもち続けた人です。先生は2000年に定年退職され、その後、韓国のポリ出版社の人たちと出会って、亡くなるまでの約13年間に、絵本を20冊、さらにはハングル辞典をはじめ、多くの書物を残されました。今、在日朝鮮人のほとんどが日本生まれです。一世はほぼ亡くなり、二世もすでにだいたい亡くなり、高齢化が進んでいます。ですから、朝鮮半島における昔話や風景を語ってくれる人が身近にいないのです。ところが先生の本を見ると、郷愁を誘う原風景が描かれていて、懐かしさを感じます。そういうことが先生の絵や絵本、漫画、エッセイなどを通じて学べる。私たちにとって、バイブルのような存在です。

朝鮮新報で2007年から2年間にわたって、先生のイラストとエッセイによる月1回の連載があり、私はその編集担当でした。先生は連載の中で、庶民の活力ある姿をいきいきと紹介されました。今回の回顧展に出品された「市の日」。大きな絵が、会場の中心に2枚展示されていましたね。私たちが昨日、

足立の朝鮮学校でやったフェスティバルのようなものが、18、19世紀の朝鮮半島にもあったわけです。「市の日」には何百人もの庶民が個性豊かに描かれています。たくさんの庶民が市場に集って、ごった返す。売り買いをしながら情報を交換する活気あふれる場面でもあります。別の角度から見ると、権力側が市場を掌握することで庶民の生活を監視できる。そういう一面もあります。あのような場を利用して権力側が庶民を罰することもあります。いろんな側面があるということを丹念に連載の中で私たちに知らせてくださいました。



洪永佑回顧展で絵本朗読を行った朝鮮学校生たち（2025年9月12日）

写真撮影：全賢哲

絵本『洪吉童（ホンギルドン）』もそうです。弾圧の中でも、不屈の魂をもって庶民が生きていく姿が描かれています。「平壤城」という作品は豊臣秀吉の朝鮮侵略を背景に、当時の朝鮮の武将の活躍を描いているものです。「祖国遥かに」は在日一世が日本での暮らしがどん底にあっても、祖国を慕いつつ、たくましく生きていく。そういう姿を描いた劇画です。

先生の親友で、朝鮮大学美術科の教授で金漢文（キム・ハンムン、1936～1991）⁶⁾ という方がいらっしゃいました。金漢文先生は、洪永佑先生よりも約30年前に亡くなれましたが、在日朝鮮人の美術運動は二人が中心になって、力を合わせて牽引され、次の世代、未来の人たちにバトンタッチをした、そういう存在です。彼はこういうふうに洪永佑先生の作品を評しています。

まるで冬の夜長におじいさんの昔話を聞くような温かい情緒世界だ。一人ひとりの表情に民族の情緒感が息づいており、単なる復古趣味や、郷愁ではない……劇画「祖国遥かに」を発表し、植民地下にあえぐ在日朝鮮人一世たちの厳しい体験を描くなど、つねに二、三世と民族の心の問題に強い関心を示してきた。その創作の根底には、溶岩のような祖国愛、民族愛が横たわっているかのようだ。⁷⁾

親友は洪永佑先生を、こういうふうに捉えていらっしゃるのだと私は感じ取りました。ですから、洪永佑先生の絵を、穏やかで庶民の生活が豊かに流れている、そういう側面ももちろんありますけれども、もうひとつの側面も決して見逃してはいけないと思います。私たちの記憶には先生の温和な横顔と穏やかな姿しかないのですが、先生の絵本や劇画の中には、祖国と民族に対する燃えるような思いが凝縮されているのです。

そして、やはり在日の文化活動の根底にあるものは言語です。皆さん数年前に韓国映画で『マルモイ』という作品、ご覧になったことがありますか。1942年に朝鮮語学会事件というものが起こりました。映画では朝鮮語の大辞

6) 東京都生まれの在日朝鮮人二世。初級学校、中級学校の教員を経て1969年朝鮮大学校美術科教員となる。1974年、在日朝鮮中央芸術団の一員として訪朝した際、朝鮮画の第一人者である鄭鐘如の手ほどきを受け、以来、油絵を捨て朝鮮画に専心した。1982年、在日朝鮮文学芸術家同盟の中央美術部長に就任。その時、洪永佑は副部長を務め美術運動を精力的に展開した。李東一（1996）「絵画と民族と教育——金漢文先生の歩み」金漢文『朝鮮の美——民族の魂を求めて』雄山閣（pp.162-174）。

7) 金漢文（1996）『朝鮮の美——民族の魂を求めて』雄山閣、p.135。

典を出版するために日本統治下で様々な弾圧に屈せず、奮闘する人々の姿が描かれています。史実では朝鮮語学会の幹部で著名な学者たちが、日本の官憲によって治安維持法違反で検挙投獄され、拷問を受け、獄死した人もいました。

その土地から生まれ、長い歴史のなかで育まれる文化、その根底にあるのは朝鮮語です。その朝鮮語を抹殺することによって、朝鮮民族の文化を封殺しようとした。そういう悲劇が 1942 年、日本の敗戦の 3 年前にソウルで起きたのです。

6. 若き感性の民族詩人、尹東柱

ほぼ同時期に、日本で何が起きたといえば、皆さん、尹東柱（ユン・ドンジュ）という詩人をご存知ですか。今、朝鮮半島の北でも南でも「国民的詩人」として愛される民族詩人です。老若男女から広く愛されている詩人ですが、1945 年の 2 月 16 日に福岡刑務所で獄死させられました。彼の詩を読むだけで、若い人は好きになるような、そういう詩を残した人です。

私は 2018 年 5 月に定年退職しましたが、その一年前、2017 年に京都の宇治川のほとりに尹東柱の日本における 3 つ目の詩碑が建てられたということで、その取材に行きました。⁸⁾ 尹東柱は 1917 年生まれ、曾祖父の代に満州に移って大豆栽培で裕福な経済基盤を作った、そういう家庭に生まれた人ですが、日本に留学し、最初は立教大学で学び、その後、同志社大学に移りました。1943 年、朝鮮語の詩を書いているということで、治安維持法違反で逮捕され、2 年後に獄死させられました。わずか 27 歳でした。一説には人体実験の犠牲者であるという研究もありますが、人柄はとても穏やかな青年だった。なぜ宇治川のほとりに詩碑が建ったのかといえば、逮捕される前に、同志社の学友たちとハイキングに来ているのです。日本の人たちがその場所に追悼の碑を建てようということで、2017 年に建てたものです。

尹東柱のもっとも有名な詩が、日本語で言えば「序詩」というタイトルです。

8) 朴日粉 (2017, Nov. 13) 「尹東柱詩碑 12 年かけ、市民らの地道な努力実る」『朝鮮新報』。

命尽きる日まで空を仰ぎ、
一点の恥なきことを

という二行で始まるこの詩が、日本の人たちも、朝鮮半島の若者も愛する詩です。

私も若い時にこの詩を読み、好きになりました。なぜこの詩に心惹かれるかといえば、人間が生きていて「一点の恥なきことを」と考えるというのは、やはり若い時の感性だと思います。時代の暗闇のなかで民族固有の言葉と文字で故郷に思いを馳せ、思索を重ねた尹東柱。その果てに若き命を奪われた。常に内省と言いますか、自己を省みる。彼の詩集のタイトルも『空と風と星と詩』という、風とか、星とかを詠う詩人だった。それが罪に値するのでしょうか。それに対する痛み、怒り、詩人への共感というものが、時空を越えて若い人たちの心に響くのだと思います。今、東アジアだけでなく、世界中で翻訳され読まれていることが、その証です。

民族の言葉の辞書を作ろうと考えた学者、民族の心を詠った詩人。治安維持法違反でなげ、彼らが死ななければならなかったのか。「在日の文化」と言う時には、必ずそうした時代を潜り抜けた歴史があることを忘れてはならないと思います。だからこそ、解放後にもすごいエネルギーで在日の人たちは子どもたちのための国語講習所を作ったのです。何をするにも、まず自分の言葉でものを考えなければいけない、それが原点にあったのです。

7. 朝鮮舞踊の創始者、崔承喜

朝鮮舞踊の大家に崔承喜（チェ・スンヒ）という人がいます。崔承喜を、ご存知の方はいますか。初めて聞きましたか。一言で言えば、スーパースターでした。

崔承喜は1911年生まれです。韓国併合（1910年）の翌年です。ソウルの両班（ヤンバン）、貴族の家に生まれましたが、日本の植民地支配で、土地や財産をどんどん日本に取られ、家は没落していきました。そういう時代の人で

す。

崔承喜のお兄さんが日本大学的美学科に留学していました。崔承喜もたいへん優秀でソウルの学校で2回飛び級して卒業。そして15歳の時に日本の音楽学校に留学しようと受験し合格しましたが、飛び級したせいで学齢に達せず入学できなかった。しかし、その時、日本のモダンダンスの先駆者であった石井漠が率いる舞踊団がソウル公演をしました。その公演を見た崔承喜は「舞踊家になる」と一大決心をして、その舞踊団に入りました。そして石井漠の指導を受け、1929年には崔承喜舞踊研究所を設立。舞踊家として一大旋風を巻き起こし、時代の寵児となりました。

1937年から3年間にわたり、欧米・南米28カ国で150回におよぶ巡回公演を行いました。この時代に世界に日本から出て行くということは、海外旅行を含めて、ほとんどありえない時代です。パリ公演で、ピカソや、ジャン・コクトーなど偉大な芸術家の目に留まり、名声を確立させます。日本では川端康成などが大ファンになっていきました。また、北京に行った時には周恩来が絶賛し、崔承喜の名を冠した芸術劇場が建てられました。日本でも朝鮮半島でも唯一無二の存在として活躍したのです。解放後は朝鮮に帰国しました。

彼女が日本の日劇（日本劇場）で公演した時は、劇場を7周り半という大行列ができて、日本中の舞踊ファン、芸術を愛する人たちを熱狂させました。その反響は新聞や雑誌を通じ瞬く間に日本各地に広がり、後に述べる「在日朝鮮人としての舞踊」を確立していく2人の女性たちの胸にもしっかりと刻まれていきました。

観客たちが崔承喜に何を求めたのかと言えば、日本に暮らしていた朝鮮人は、植民地支配に打ちひしがれていた時代です。差別にあえぎ、朝鮮人としてどう生きるかについて、いつも考えているのです。そういう中で彼女の舞台を見て、全身で朝鮮民族の舞踊を伸びやかに踊っている姿が、強烈な民族のオーラとして受けとめられたのです。その舞台を直接観て、あるいは出版物を通して崔承喜の存在を知った男性たちが、自分の娘や姪に「朝鮮人として、舞踊家として生きなさい」と希望を託しました。そのようにして生まれた在日朝鮮人の朝鮮

舞踊家を紹介したいと思います。

8. 生きる希望としての朝鮮舞踊、朴英美

2011年に崔承喜生誕100年を記念して朝鮮舞踊祭典が広島で行われ、私はその取材に行きました。朝鮮の舞踊だけではなく、日本の和太鼓奏者やさまざまなジャンルの邦楽の人たちも参加した素晴らしい舞台でした。その舞台の企画・総監督を務めた朴英美（パク・ヨンミ）さんのお話をします。

朴英美さんは1947年生まれで、今（2025年）78歳です。朝鮮新報に電話があり、この公演の取材に私を指名してくれました。なぜ私が？ということですが、当時、私は在日一世の聞き書きをしていて、月に1回、1年間に12回というペースで朝鮮新報に連載中でした。その記事を愛読していて、取材を私にと呼んでくださったようでした。



崔承喜生誕百周年朝鮮舞踊祭典（2011年12月4日）

写真提供：朴日粉

朴英美さんは、植民地時代に日本に来られたお父さんと山口県の山村に暮らしていました。1947年生まれの英美さんはお母さんを6歳で亡くし、3歳年

下の弟がいました。そんな幼い頃、父から崔承喜について「植民地時代の暗い日々にあっても、不屈の魂をもち続け、朝鮮民族を照らし続けた存在」だと聞かされたことをかすかに覚えていたそうです。英美さんは日本の学校に通い、そこですさまじいいじめにあいました。弁当に虫や泥を入れられたり、掃除中に頭へ水浸しの雑巾を被せられたり、そういういじめが毎日のように続いた。お母さんがいたら、お母さんに相談することもできたかもしれませんが、お父さんが外で働いて、疲れて帰ってきてそんな話をしたら、お父さんに心配をかけるだけなので、自分の苦しみを訴えることができなかったそうです。しかし、そのことがやがてお父さんに伝わり、一家は広島に転居します。英美さんは広島朝鮮第一初級学校（当時）に編入して、そこで初めてウリマル（私たちの言葉、朝鮮語）や朝鮮文化に触れたのです。

朝鮮の学校でも在日の集いでも「オッケチュム」というのを輪になって踊ります。お年寄りも韓国の人たちもよく踊ります。これは騎馬民族が馬に乗って手綱をさばく、その際の肩の動きを表しているそうですが、広島に引っ越しをして、在日朝鮮人一世が踊る姿を初めて見た英美さんは、感動して「朝鮮舞踊をやりたい」と思ったのです。

朴英美さんがその夢を叶えたのは27歳の時でした。朝鮮学校の幼稚園の教員になりました。しかし、その当時、学校や幼稚園には舞踊指導員が不在でした。そこで、英美さんは自ら名乗り出たのです。そこで、英美さんは広島にあった葉室バレエ教室の門を叩いて指導法を学ぶことにしたそうです。葉室バレエ教室というのは、世界的プリマドンナの森下洋子さんが通ったことで有名です。その時の葉室先生の第一声は「朝鮮には崔承喜さんが作り上げた素晴らしい舞踊があるでしょう」という言葉だった。うれしかった。幼いころに父から聞かされたその名が蘇ったのです。

その言葉に力を得て、朴英美さんは崔承姫の舞踊スタイルを学び、子どもたちに伝えることに心血を注いでいくようになりました。英美さんは広島で校長を含め20数年間、教壇に立ちました。その傍ら、広島歌舞団の団長、広島文芸同委員長を兼任され、地域の在日朝鮮人文化活動の中心的担い手として半世

紀以上にわたり尽力されました。「つらくて挫けそうな時、人は生きるために感動を求めます。崔承喜の踊りにはそれがあります」という英美さんの言葉が印象的でした。

9. 朝鮮舞踊の継承者、任秋子

続いて任秋子（イム・チュジャ）さんという朝鮮舞踊家を紹介します。金剛山歌劇団の舞踊部長を長くなさって、舞踊家としてだけでなく、振り付けの第一人者でもありました。教え子たちがたくさん育っています。私は2004年に任秋子さんにロングインタビューをし、後に書籍に収録しました。⁹⁾

任秋子さんは、1936年、名古屋生まれ。日本の敗色が濃厚になった1945年初め故郷への引揚げを決心した両親に連れられて、川崎に住むおじさんの家に挨拶に行ったそうです。同年には川崎でも名古屋でも東京でも激しい空襲がありました。ちょうど川崎を訪れたときに空襲にあって、帰郷を断念せざるを得なかったのです。

解放後は名古屋には戻らず、両親と共におじさんの近くで暮らそうということになり、川崎の南武朝鮮初級学校、東京朝鮮中高級学校に通いながら、石井漠舞踊研究所に入門しました。彼女に朝鮮舞踊を本格的に習うよう勧めたのが、その川崎に暮らすおじさんだったのです。「日劇で観た崔承喜の舞台に心を揺さぶられた。彼女の踊りと血管のすべてに民族愛がほとばしっていた」と秋子さんに何度も話して聞かせたそうです。そのおじさんの影響もあり、任秋子さんは崔承喜と同じ道を辿ります。クラシックバレエ、モダンバレエ、民族舞踊。崔承喜の背中を追いかける喜びでいっぱいだったそうです。崔承喜は20代の若さで崔承喜舞踊研究所を作りますが、任秋子さんも、朝鮮学校を卒業した後、1957年に21歳で舞踊団を旗揚げします。100人以上の門下生を抱える、大きな舞踏団に育て上げました。

ところがです。帰国船が祖国と日本を往来するようになり、崔承喜の教本

9) 朴日粉・金潤順（編）（2004）『生涯現役 在日朝鮮人一愛と闘いの物語』（同時代社）収録、「朝鮮の土の香りがする舞踊を求めて―任秋子」（pp.193-204）。

「朝鮮民族舞踊基本動作」(1957年10月刊行)が1959年に、1961年には動作を録画したフィルムがもたらされました。在日の朝鮮舞踊界にとって画期的な出来事であったということです。この「朝鮮民族舞踊基本動作」は、今でも日本、あるいは朝鮮半島、世界中の朝鮮舞踊を踊る人の基本です。1962年には金剛山歌劇団の前身である中央芸術団ができます。この時、任秋子さんは一大決心をします。自分の舞踊団を解散して中央芸術団に入り、ソロの舞踊家として活躍しました。後には振り付けも手がけ、後進を指導する。そういう生涯を送りました。

話が前後しますが、朝鮮半島では1953年に朝鮮戦争が停戦します。南北400万人の朝鮮民衆がこの戦争で犠牲になりました。平壤も北の多くの都市も農村も焼け野原になりました。停戦の翌年の1954年に、崔承喜は金日成主席から「朝鮮舞踊を確立せよ」との指示を受け、同年、全国から舞踊家を募集したそうです。

3000人の女性たちが応募し、15日間にわたるオーディションを経て30人まで絞り込まれたそうです。その30人が崔承喜によって徹底的に鍛えあげられる。その時の様子について、1980年、国立平壤芸術団が日本で2ヶ月にわたる公演をした折に、崔承喜から直接指導を受けた人民俳優の洪貞花(ホン・ジョンファ)さんから直接話を聞くことができました。

洪貞花さんは当時選ばれた精鋭30人のなかの一人でした。オーディションが行われた1954年当時は14歳の少女だったそうです。朝鮮舞踊を将来にわたって繋いでいくために選抜されたということです。平安南道の小さな寺で行われた審査では、膝の関節、骨盤、肩、爪まで、細かく審査されたそうです。その30人は、基本動作を徹底的に身につけました。手拍子、腕を振る動作、膝を打つ動作、飛ぶ動作、回る動作、それらのひとつひとつが大事で、中でもっとも大事なのが、歩く動作だったそうです。その「基本動作」は、在日に伝授されて66年経つわけですが、先ほど話した朴英美さん、任秋子さんをはじめとする第一世代、その人たちから教わった第二世代、そのまた次の若き指導者らによって受け継がれていっています。

崔承喜は厳しい環境の中でも下を見ず、前を向いて民族舞踊を確立していった。千年以上にわたって脈々と受け継がれてきた朝鮮舞踊を「舞踊の核心は、基本動作にある」と身体的にシンプルに捉え、理論化したのです。だからこそ、時代が変わっていても国境を越え、受け継がれていくのだと思います。それは舞踊だけではなく、すべての分野、領域で、表現者が会得すべき文化・文芸・芸能継承に共通の真髄なのではないでしょうか。

10. 金剛山歌劇団のスター、チャンセナプ奏者、崔栄徳

最後にチャンセナプという楽器の演奏家の崔栄徳（チェ・ヨンド）さんをご紹介します。金剛山歌劇団のスターで、どこに行っても演奏しても、音楽ファンを惹きつけます。チャンセナプの演奏で、踊ったり歌ったり、とりわけ一世の人達は、昔の民族の原体験とか原風景にタイムスリップするのだと思います。メロディーが郷愁を掻き立てるのです。

崔栄徳さんはまだ50歳ですが、今回、皆さんにお伝えしようと思い電話取材をしてきました。朝鮮新報の記者時代にはよく取材したのですが、彼の音楽性の源、なぜ日本生まれの彼が民族性豊かな演奏を身につけることができたのかということを知っているようで知らなかったことに気づかされました。

チャンセナプとの出会いは、東京朝鮮第八初級学校（当時）の4年生から始まるクラブ活動だったそうです。チャンセナプという楽器は、日本では作れないので朝鮮から送られてきます。当時は学校に1つだけあったそうです。その1つが修理に出されていて1年間練習できなかったそうです。彼はチャンセナプを5年生の時にようやく手にするのですが、家でも、休み時間でも、とにかく一生懸命吹いていた。オモニ（お母さん）が、学校の先生に「なんとかやめさせてほしい」と相談したぐらい、夢中になって練習したそうです。

チャンセナプとの出会いは、先輩が吹いていたその楽器の音色に魅せられたから。ライバルが3人がいて、じゃんけんで勝って「ゲットした」そうです（笑）。すべて偶然が重なったように聞こえるかもしれませんが、神様が彼を選んだのかと思うぐらい。でも、手にした時の心境は、嬉しさと不安が同居し

ていて、誰に習ったらいいのかと悩んだ時期もあったそうです。

その不安が解消されたのが中1から高3まで、毎年受けた朝鮮の平壤音楽舞踊大学での通信教育でした。通信教育というのは、夏休みを1ヶ月まるまる平壤に滞在する朝鮮学校独自の短期留学制度で、オーディションを受けて合格した者だけが受講できます。崔さんの場合は平壤の2人の大学教授に稽古をつけていただいたそうです。

その時に訪問した平壤音楽大学では、学友との出会いもありました。その学友のお父さんが朝鮮最高峰の万寿台（マンスデ）芸術団の演奏家で、その方から習う機会に恵まれたそうです。大学の教授に習うだけでも貴重なことです。平壤で知り合った学友が家に招いてくれ、お父さんと引き合わせてくださった。そういう機会に恵まれたことが、彼は「一番の幸運」と言っていました。

この平壤で大学の先生から直接教わる「通信教育」という制度は、日本から平壤に行く交通費は自前ですが、向こうでの滞在費は1ヶ月約5万円です。このように朝鮮では、異国で育つ、恵まれた才能の持ち主たちのために、学ぶ機会を与えてくれます。コロナ禍以降、そういうチャンスが途絶えていますので再開されることを願っています。

在日三世の崔栄徳さんが、どうして朝鮮の情緒豊かな音楽を身につけることができたのかといえば、もちろん通信教育で特別な教育を受けたということも大事ですが、栄徳さんのおばあさんが、渡日して、様々な苦労の末に焼肉屋を始められ家庭を支えていました。おじいさんは私たちのコミュニティ、総連の支部委員長だったので、二人の周りにはいつも同胞たちが集まり、冠婚葬祭の時も、そこには歌や踊りが絶え間なくあったそうです。特別な時だけでなく、楽しいことがあれば、おばあちゃんが先頭になって歌って踊る。そういうおばあちゃん存在が大きかったそうです。

今まで演奏家として日本中、アメリカでもソウルでも平壤でも公演した金剛山歌劇団のスターでもあります、「地元の世田谷の小さな民衆の踊りの輪が、自分の音楽を育て、鍛え上げてくれた」と、そういう体験の重要性を語っていました。

在日の文化には、そういう広がりと言いますか、一世から連綿と受け継いでいるものがあります。洪永佑回顧展の後、皆さんと一緒にハンアルム管弦楽団コンサート¹⁰⁾にも行きました。崔栄徳さん、尹慧瓊さん、河明樹さんが民族楽器を演奏されました。日本全国の同胞たちが、こういう公演を楽しみにしています。一方で、音楽や芸術は、やはりお金がかかります。邑翠文化財団をはじめ、多くの心ある同胞や日本の音楽ファンたちが支援をして今につながっています。



ハンアルム管弦楽団公演『歩～move on～』（2025年9月15日）

写真提供：朴日粉

10) ハンアルム管弦楽団は、許道鎮氏が率いる、在日コリアンと日本人の演奏家たち百名あまりを擁するオーケストラの楽団で「ハン」は「ひとつの」、「アルム」は「美しさ」という意味。フルオーケストラに朝鮮の民族楽器、民俗音楽をあわせた編成が特徴。立ち上げは2019年だがコロナ禍に見舞われ、初公演『胎動～movement～』は2022年、神奈川、大阪、北海道の三都市で開催された。翌2023年には『誕生～birth～』、2025年は『歩～move on～』公演がミューザ川崎シンフォニーホールにて開催された。

【質疑応答】

11. 異文化への気づき

＊：ジャーナリストというご経験を踏まえて、ご自身がカルチャーショックと
いいですか、ひとつの物事について違う価値観があることに気づくといっ
た経験があれば教えてください。

朴：平壤を訪れて初めてわかるということがたくさんあります。ホテルにい
ると、東ヨーロッパや色んな国から旅行者が来ています。その中に日本
人も、リュックサックを背負って1人で来ている人がいたので、日朝の
国交がない中で「どうやって来たの？」と聞くと、旅行社にコンタクト
して、中国やロシアから入って、自分の好きなのところに1人でさっさと行
ってさっさと帰るのだそうです。すごく心も体も自由だと思いました。若
い人たちを「今の若者は」って括るのは駄目だなと、平壤で教わりました。

それから、私は子どもが2歳と6歳の時に平壤に連れて行きました
けれど、仕事ですから最初、平壤市内の保育園に面倒を見てもらおうと
思ったのです。大同江ホテルに滞在しましたが、そこで働く人たちが
「自分たちが面倒見る、保育園に入れなくていい」と言っていて、ホテル
内の喫茶店のお姉さんたちがよく面倒をみてくれました。日本でいう
蒸かし芋とか、お手製のおやつを作ってくれて、とても可愛がってく
れました。その時、6歳だった、小学校にあがる前の息子に「ここに住
む？」って聞いたら「帰る」って言われました（笑）。私が「なんで帰
るのよ？」って聞いたら、「テレビのマンガが見られないから」って言
われて、やっぱり日本のマンガって魅力的なのですね。「だから日本に
帰る」って言われてちょっとがっかりしました（笑）。ただ、子どもた
ちを見ていて、そういうふうオープンにしておけば、向こうの人にも
通用するものだと感じました。沢山のことを平壤で教わりました。です
から、もうすこし状況が良くなって行けるようになったら、皆さん色ん
なものを飛び越えて、いらっしやってみてください。きっといい経験が

できると思います。

12. 朝鮮自治区と在中朝鮮人（中国朝鮮族）

＊：私は中国出身です。去年、中国の朝鮮自治区を訪れました。その人々も朝鮮語を話したり、朝鮮語の看板を使ったりしていますが、先生はこの中国にいる朝鮮人のグループをご存知ですか。その人々と在日朝鮮人の違いがもしあれば教えてください。

朴：私も中国に何度か行き、在中の朝鮮人に通訳をしてもらったことも何度もありました。その人たちと違和感なく打ち解け合いました。朝鮮に行くと、よく在中朝鮮人の人々が団体旅行で来ているのを見ます。その人たちと仲良くする機会はあまりなかったです。

ただ、私たちが在日コリアンとして、色んな催しに招かれる時には、いつも隣のグループにいます。ひとつ、私たちと違うと思ったのは、向こうの指導者に気軽に声をかけるところです。中国の人たち、特におばさんたちのグループは、遠くから見える指導者に向かって「金総書記ー！」って一斉に叫ぶのです。在日はしません。こういうのはちょっと私たちと違うなど気づきました。

あと中国の人たち、在中の朝鮮人は、国籍が中国ですよ。私たちのコミュニティには日本国籍を取得した人も多いですが、朝鮮、韓国籍、日本国籍など様々です。¹¹⁾ 私の家族に限って言えば、私は6人きょうだいで、日本の学校を卒業して日本の企業に入る、あるいは長年企業勤めをして役職につく、海外出張に出る、などをきっかけに日本国籍の取得を選

11) 解放後も日本で生活する在日朝鮮人について1947年5月2日に外国人登録令が出され「朝鮮」と記載された。これは朝鮮民主主義人民共和国の公民という意味ではなく、いわば出身地域を表す「記号」、カテゴリーとしての記載であった。以降、日韓法的地位協定(1965年)を契機に韓国籍を取得する者が増えるが、さまざまな信条、事情によって朝鮮籍を維持する人もいる。その経緯の詳細、複雑性については李里香(編著)(2021)、『朝鮮籍とは何か——トランスナショナルな視点から』(明石書店)に詳しい。

択した兄もいます。ひとつの家族の中で、日本国籍を取得した人、韓国籍の人、親戚でも色んな人がいます。私が子どもの頃は総連系と民団系が、法事の時に喧嘩していました。確か父の甥が広島から来て、喧嘩して先に帰っちゃう。「なんであの人はいつも怒って帰るの？」って思っていました。でもまた何か月後には我が家にやって来るのです。だから「本当に喧嘩していたわけではないのか」と不思議でした。そういう思い出があります。

13. 今、大切に思うこと

＊：朝鮮新報が80周年を迎えられたということで、在日コリアンと日本をつなぐ役目や使命があるというお話がありましたが、今、文化財団の活動の中で大切にしている気持ちをさらに詳しくお聞きしたいです。

朴：私、今、小学校4年生の孫がいます。朝鮮幼稚園に3年間通って、今小学校4年生で、サッカーをやっています。11月初旬に全国の大会があるので、そっちに夢中ですよ。すこし前までは、上野動物園に2人で行って、とても楽しく遊んでいたのですが、今は夢中になれるものできて、あまり遊んでくれません。ちょっぴり寂しい気もしますが、やっぱり朝鮮学校の中で、勉強やスポーツをして、すぐくのびのびと楽しそうですね。

ところが全国的に見ると、出生率が低いこともありますが、やはり2000年の拉致問題以降、朝鮮学校に対する嫌がらせがあります。子どもたちに親が付き添って学校に行くとか、そういう時期もありました。こういう事件が起きる度に日本政府、メディアが北朝鮮バッシングをして、その矛先が朝鮮学校に向けられる。親が三世で、その子どもが四世、五世。子どもたちには何の罪也没有。「北朝鮮＝朝鮮学校に通う子どもたち」ではないのです。そこが私は見ていてつらい。日朝両国の間で、政府間の話し合いを進め、対立ではなく対話を重ね、平和の方向

に進むよう望んでいます。

14. マイノリティとして生きるということ

＊：僕は卒業論文のテーマとして、バイリンガルのアイデンティティの変容について論文を執筆していますが、今日のお話で、マイノリティの方々のアイデンティティというところのお話を伺って、自身が取り扱っている内容は、マジョリティのアイデンティティの話をしているということがわかったのと、今日のお話はマイノリティのアイデンティティはマジョリティの社会の視線に常にさらされているというお話が聞けた機会だったと思いました。

朴：先ほどお話ししたように、世の中がどうあっても、心を強くもって、自分は強く生きていくというふうに、私たちの世代は厳しい波風を乗り越えてきました。ですが、孫たちが育っていく環境を見ると、どうしてもそうじゃない。日本にいる在日コリアンの人たちは、そういう心配を抱えているのです。それがコミュニティの縮小につながります。内側からなるべく朝鮮色を捨てて、日本社会に同化する方向に向かっていくのではないかという危機感があります。ネット上で飛び交う差別、排外主義の言説に心を痛めない在日はいないと思います。

朝鮮新報の80周年を祝いながら、後輩たちと語り合いました。若い人は若い人で自分なりの使命感をもっている。だから、今、朝鮮学校の学生数が減ったり、朝鮮新報の読者数が減ったり、そういう困難に直面しながらも、祖国と在日を繋ぐ情報を正しく伝える。それから在日同胞の人権、民族教育の権利を守る。そして各地で広がる日朝市民の交流の様子を伝えていくことが、とても重要だと思っています。

今、高校無償化から朝鮮学校が除外されていることと闘っています。かつて在日朝鮮人学生らが除外されていた通学定期券の学割適用が、全国の朝鮮学校のオモニと市民たちの長い闘いの末に1994年、実現したことがあります。清水澄子さん（1928～2013）という社民党参院議員

が、細川内閣の末期に差別の問題としてとらえ、オモニたちの訴えを国会に届け、実現したのです。日本の民主主義がまだ、少し機能していた時代です。朝鮮学校生の高校無償化除外問題については、各地で裁判闘争を続けて最高裁にまで訴えたのですが、敗訴となりました。今は朝鮮学校の子どもたちや保護者、日本の市民たちが、毎週金曜日に文部科学省の前で抗議活動をずっと続けていますが、彼らの願いは実現していません。国連の条約に基づき、関連機関が日本政府に差別是正の勧告を出していますが、日本政府には届かない。そういうことがこの十数年続いています。

現在、日本の小中学校でもいじめや不安、うつなどの理由で、35 万人以上の子どもたちが不登校に苦しんでいるという状況がありますが¹²⁾、そこにもつながっていると思います。知らず知らずのうちに弱者に強い同調圧力をかけている。排除の論理、排外主義が学校にも社会にも蔓延していないか。朝鮮学校生に対する無償化除外の問題はそういうことを映し出していると思います。だから決して他人事ではないのです。誰かが苦しんでいたら、自分のことのように心配して手を差し伸べる、思いを寄せる。大事なのはそういうことだと思います。

15. 朴日粉さんの来し方、幼少期から朝鮮新報入社まで

*：朴日粉さん自身は日本の学校に通われたそうですが、なぜ、どのように民族と出会われたのか、朴さん自身の生い立ちについて伺えればと思います。

朴：私は山陰地方の田舎で育ちました。朝鮮人の家庭はうちだけでした。父は 18 歳の時に朝鮮から日本に来て木材業をやっていました。私は 6 人きょうだいの 5 番目なので、私が生まれた時、父は 40 歳近かったので

12) 2024 年の小中学校の不登校児童生徒数は 357,970 人。病気療養、経済的理由をあわせると 506,970 人。文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2025. Oct. 29). 「令和 6 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」(p.68). (https://www.mext.go.jp/content/20251029-mxt_jidou02-100002753_1_4..pdf).

すが、もう見るからに朝鮮人です。母は、8歳の時に日本に来て、学校を出て、日本語もとてもきれいに話し、経理もできる。父は朝鮮語しかできない。

学校で私は日本名で呼ばれていましたが、町中、我が家が朝鮮人だと知っている。「朝鮮人」といじめられた記憶はありません。兄が3人いて、3人とも強い。学校の「親分」はみんなうちの兄貴たち。ですから私に手を出すということはあり得なかった。たまに私が喧嘩をふっかけられても、その男の子たちを私がボコボコにする。その男の子が母親に連れられてうちに抗議に来たことがありました。うちの母親がまた強い人で「うちの娘になんて言ったんだ。朝鮮人で何が悪いのだ！そういう風に朝鮮人って叫ぶお前の子が悪い」って追い返す。そういう家庭だったので、私は委縮することがなかったのです。

私までは強かったけれど、弟が末っ子で、とても優しい子でした。うちの家族の中で唯一いじめられて泣いて帰ってきたことがありました。そうしたら私がバットを持って追いかけて、仕返しする。今からは想像できないと思いますけど（笑）暴れん坊だったんです。今でもその同級生たちと5年に一回くらい同窓会をして、昔の思い出話を語り合います。出雲空港まで私を車で迎えに来てくれる友人がいます。昔、私たちの時代は、先生に勉強ができない男の子の面倒を見ろと言われて、私がその子の面倒を中3までずっと見たのです。私が先生に代わって勉強を教えてあげる。それでも0点。それで私が「なんで教えたのにわからないの」とバシンと。そんな風だけど、今でも行くたびに車で送り迎えしてくれる。そういう学校生活でした。

暴れん坊の兄は、国立大学に入りました。当時としては珍しいことで、そういうこともあって私に対してみんなが一目置かざるを得ない。朝鮮人だけどあの子に手を出したら駄目という空気があって、露骨な差別はありませんでした。

ただし、うちの父親は儒教思想の塊。とにかく男の子が優先です。学

校の通信簿、成績表も兄のしか見ない。父親は字の読み書きはほとんどできませんでしたが、字の上手い下手はわかって、兄はよく「字が下手だ」と叩かれていました。でも私に対しては、「女の子は勉強しなくていい」と言う、そういう親でした。

私は、小さい時から本が大好きでしたが、親は8時か9時には一斉に電気を消して寝なさいと、電気をつけると怒られます。小学校4年生の時に1番はまっていたのが三浦綾子の『氷点』で、朝日新聞に連載されていました。朝一番に朝日新聞を取って来て、それを最初に読む。そういう子どもでした。小さい時から文章が好きで、本を読んだり、考えたりは好きでしたが、民族に出会うということはなかったのです。

うちはとにかくアボジが中心。父親が帰ってくるまで寝ては駄目でしたし、父親が帰ってきたらみんなで玄関に迎えに行き、なぜかこっちが「帰りました」と言う（笑）。テレビが小学校何年生かの時に入って、大河ドラマの一回目『花の生涯』を見るのが楽しみで。ところがテレビを見ていると足がちっと開いたりするじゃないですか。そうすると、「女の子なのに行儀が悪い」と言って足を叩かれる。畳のへりを踏んだらまた父親に怒られる。そういうことにはとても厳格でした。

父は朝鮮の慶尚南道の田舎出身なので、娘に対する厳しさをもっていました。私は高校を卒業して、大学に進学したかった。兄弟たちは松江や出雲、広島に下宿しながら高校を卒業、大学に進んだ兄もいました。私だけ高校も家から通える学校で、そこに選択の余地はなかったのです。私はとにかく「二十歳になったら結婚しなければいけない」と父親にいつも言われていました。もう相手を決めていた感じもあって、そういうところから一刻も早く出たかった。それで東京に出て来たのです。その東京に来る足掛かりが、当時の朝鮮総連の島根県本部の委員長でした。朝鮮新報の当時の主筆に話をつけてくれて入社しました。

私は高校時代に県立高校の新聞部に入っていて、社説を書いたりしていました。それで、その総連島根県本部の委員長が学校に私の成績を確

認しに来たようでした。それで朝鮮新報社を勧めてくれたのだと思います。その前にその委員長は父に「朝鮮大学に行かせたらどうだ」と言ったようでした。父が私に「大学に行きたいなら朝鮮大学ならいい」と言ったのです。私はそれにカチンときてしまって、父の豹変ぶりが承服できなかったんです。

それで就職する道を選んだのですが、その選択は間違っていないでした。朝鮮新報で思う存分勉強することができました。当時、朝鮮大学や朝鮮高校の卒業生が40人くらい配置され、翌年に20人が減る。半分ぐらいいなくなるという時代でした。朝鮮時報に配属になり、若い人達のグループの班長が、私の朝鮮語の先生になり、マンツーマンで朝鮮語を教えてくれました。

ところが私は朝鮮語ではなく日本語の部署に配置されました。最初は朝鮮語の翻訳を徹底的に教わり、先輩から取材のイロハを習って、実践で鍛えられていきました。色んなことを教わり、自分なりに勉強もしました。やがて、多くの先生方と取材を通じて知り合い、多くを学びました。日朝の近代史は中塚明先生、山田昭次先生、そして朝鮮古代史は上田正昭先生、大塚初重先生¹³⁾……素晴らしい先生方と取材を通じて出会い、学び、その深い朝鮮体験を伺うことができました。記者としてこうした学識豊かな先生方と知己を結びながら、寄稿文を掲載できたこと、インタビューに登場していただいたことは私の記者生活の一番の誇りでもあります。何より在日の読者がとても共感してくれることが私の喜びでした。日本人の先生方は日本が朝鮮を植民地支配したという贖罪意識が強く、朝鮮と国交正常化をすべきだという強い思いをおもちでした。私は作家、ジャーナリスト、学者、俳優など、さまざまなジャンルの第一人者の方々に取材や原稿を依頼して断られたことはありません。学び

13) いずれも、朴日粉(2018)『過去から学び、現在に橋をかける——日朝をつなぐ35人、歴史家・作家・アーティスト』(梨の木舎)に収録。

ながら原稿を書く、書きながら学ぶ。そういう実践ができた朝鮮新報という器が私に合っていました。

16. 1970年代から2000年までの日朝芸術交流に思う

＊：在日朝鮮人の文化活動が困難の中でどのように守られてきたのか、芸術や舞踊がどのように在日朝鮮人という立場に影響しているのかについて、貴重なお話でした。朝鮮新報が祖国と同胞を繋ぐメディアであるというところ。メディアがどういう人々をどう繋いでいるのか、というところが興味深く、さらに詳しくお聞きしたいと思いました。

朴：1973年に万寿台芸術団が、1978年にピョンコマ（平壤学生少年芸術団）、国立平壤芸術団（1980年）が来日しました。この時代はとても良かった。多くの日本の方たちがコメントを寄せてくれました。作家の松本清張さん、日本画家の向井潤吉さん、歌舞伎役者の二代目中村鴈治郎さんなどが歓迎コメントを寄せてくれました。国立平壤芸術団の公演を観覧した岡本太郎さんは「朝鮮から日本への文化の流れをいまさらながら知らされた」と語ってくれました。1991年にはポチョンボ電子楽団、1992年には朝鮮国立交響楽団が来日しました。

万寿台芸術団は革命歌劇『花を売る乙女』を上演したのですが、NHKと朝日新聞が後援し、日本全国で18万人の観客を動員しました。日本の観客からも絶賛を受けましたが、朝鮮の音楽や芸術を直接見るという、在日の子どもたちにとっても華やかな朝鮮舞踊を生で見る最初のチャンスだったのです。先ほど話した舞踊の基本動作が高度に洗練され、華やかに繰り広げられるのを見て、子どもたち、若者たちが直接に影響を受けました。

平壤芸術団は2カ月の間に22都市をまわり、50公演、11万人が鑑賞しました。先ほど話しました洪貞花（ホン・ジョンファ）さんがソリストとして踊られました。崔承喜に直接師事し、それを体現したものを

日本にいる舞踊家たちが見ることができたのです。

1978年に平壤、学生少年芸術団（ピョンコマ）が来たとき、これだけ朝鮮から大きな芸術団が来たのは後にも先にもありません。日本全国、東京を皮切りに主要都市で45公演、15万人の観客が観覧しました。日本政府としても国交のない朝鮮からこれだけの人数が来るということで厳戒体制をしていました。日本の警備陣と、朝鮮総連の警備陣がびっしりといったわけです。羽田空港に飛行機が着陸した時、タラップにバスが横付けになったので、私は取材班の一人で、当時24歳でしたけど、彼らの第一声を取材するためにパッとそのバスに乗ったのです。

それが後で大問題になりました。予定のない行動をしちゃいけないということを私は知らなかったのです。取材をしたい一心でそのバスに乗ってしまったもので、平壤から来た子どもたちを片っぱしから、初訪日の感想を聞いて回ったのです。朝鮮総連の警備陣から朝鮮新報が叱られたそうです。取材団の上司が呼ばれて「予定にない行動をするなんて、とんでもない」と、かなり絞られたそうです。私自身はお咎めなしでしたが、そういうことがあったので個人的にも思い出深い出来事で、何十年経っても、あの時のことは忘れられません。

本当に良かった……。

良かったというのは、日本列島に朝鮮芸術の一大旋風がまき起こったことです。こういう風にお互いに胸襟を開いて、芸術や文化を堪能できる、そういう日がまた来れば、どれだけ素晴らしいことかと思うのです。

謝辞：ゼミ合宿で訪れた洪永佑回顧展から講演、本稿の校正に至るまで、いつも変わらず丁寧に対応と対話をしてくださいました朴日粉さんに感謝申し上げます。在日朝鮮人の文化活動の系譜、市民レベルの日朝文化交流の歴史と意義、可能性を学ばせていただきました。写真提供と掲載許諾をくださいました方々にも感謝申し上げます。